

<書評論文>

社会運動の個人化

—— 社会的排除・ホームレスギャング・拒食症・落書き・エスニシティ ——

Kevin McDonald ⁽¹⁾,
Struggles for Subjectivity: Identity, Action and Youth Experience,
 (Cambridge University Press, 1999)

濱 西 栄 司

はじめに

本稿の目的は、『主体性をめぐる闘争』の位置付け・紹介・批評を、一貫した視座からおこなうことにある。そのために、まず1節で、本稿全体の論述の補助線となる見取り図——運動研究全体をまず説明／解釈に区分し、さらに後者を集合体／個人、一方向／双方向という軸で下位区分したもの——を構成し、本書をその中に位置付ける。2節では、その見取り図を参照しながら本書の概要（第1章、第1部、第2部）を紹介していき、「個人」の水準から「双方向」的に「運動の解釈」をおこなうアプローチをとる本書が（2.1）、「集合体」の水準に議論を限定するアプローチ（2.2）や、理論から運動を「一方向」的に解釈するだけのアプローチ（2.3）を、どのように批判し乗り越えようとしているかが描かれる。3節でおこなわれる本書の批評も、見取り図のなかでより小さな範疇からより大きな範疇へと比較対象を拡大していくかたちでなされる。まず本書と、おなじく「個人」・「双方向」アプローチをとる諸研究とを比較し（3.1）、つぎに本書と「集合体」アプローチを（3.2）、そして「一方向」アプローチを比較し（3.3）、最後に本書と「運動の説明」アプローチとを比較していく（3.4）。このように一貫した視座を全体にわたって確保することで、脈絡の無い内容紹介や、関連性に乏しい比較、＜ないものねだり＞の批判といった

⁽¹⁾ 1955年～。メルボルン大学教授。博士号をEHESS（パリ社会科学高等研究院）で取得。

ものを避けて、必要十分な書評をシステマティックなかたちでおこなうことができると思われる。

1 位置付け

社会運動研究は、「運動の説明」と「運動の解釈」に大別される⁽²⁾。まず「運動の説明」とは、「社会運動」の生起・構造・過程・結果を因果論的・目的論的に説明するアプローチのことである。具体的な手続きは、外見的に把握可能な指標から構成される操作的な定義の策定、それに合う集団・組織のある型の「社会運動」としての同定、資源動員・政治的機会構造・フレーム調整などの諸次元に関する仮説の検証、から構成される。他方、「運動の解釈」とは、そもそもある活動が「社会運動」といえるのか、現在、「社会運動」はどのようなものになりつつあるのか、などについて、モダニティに関する何らかの議論を参照しつつ解釈(理解)するアプローチを指す。＜「社会運動」とは、モダニティの潜在力の担い手である＞とする「基本テーゼ」は共有されるが、モダニティ論自体はさまざまである——例えば、脱産業社会論・脱近代化論（A. TouraineやF. Dubet, K. McDonald）、後期資本主義論（U. Habermas, C. Offe）、モダニティの高次化論（A. GiddensやU. Beck, Z. Bauman）など。マルクス主義的運動論やカルチュラル・スタディーズの運動研究も基本的にこのアプローチに含められる。本書『主体性をめぐる闘争』も、「運動の解釈」のひとつである。

ただし、「運動の解釈」は、さらに以下のように下位区分できる。まず運動と理論の関係性に関して、「一方向」（的にモダニティ論から運動を解釈するアプローチ）／「双方向」（的にモダニティと運動を解釈しあうアプローチ）に区分できる。「一方向」的アプローチ（表1：＜A＞と＜C＞）は、モダニティについての特定の理論を仮定して、そこから演繹的に議論を進めていき、どのような活動がモダニティの潜在力を担う「社会運動」であるかをおおまかに示した後で、具体的な活動をピックアップして傍証とするものである。たとえば、Habermas, Giddens, Bauman, Beckなどの議論に見られるものであり、そこではマクロな枠組みから運動へ一方向的に解釈をおこない、逆に運動の現実によって枠組みが変化するということはない。それに比べて「双方向」的アプローチ（＜B＞と＜D＞）は、一旦モダニティについての特定の理論を仮定して演繹的に運動の理念型を構築するものの、次に実際の活動を具体的に調査することで枠組みを修正していき、モダニティについ

⁽²⁾ G. H. von Wrightの議論に基づいて、大畑（2004）が提案する区分。

での考え自体も改変させていくものである。マクロな枠組みと運動の双方向的な解釈を追求するこの姿勢は、Touraineをはじめとして、トゥレーヌ学派第2、3世代の社会学者たちの運動分析にみられる⁽³⁾。つぎに、「運動の解釈」は、依拠するモダニティ論の特性によって「集合体」(の水準のみに焦点を合わせるアプローチ) / 「個人」(の水準から議論を組み立てるアプローチ) に区分できる。「集合体」アプローチ (<A>と) は、おもに60・70年代の「新しい社会運動」論(HabermasやTouraine)にみられたものであり、集団や組織といった集合体に注目するが、基本的に個人は出てこない。逆に「個人」アプローチ (<C>と<D>) は、個人的なコンフリクトのレベルから議論を立ち上げ、そこから集合体の特性へと論述をつないでいくものである。GiddensやBeck、DubetやMcDonald(本書) など、比較的最近の議論によく見られるものであり、個人の特性を解釈し、そこに「社会運動」の萌芽、あるいは「社会運動」そのものをみる。以上の区分を整理すると表1のようになる。

表1 社会運動研究の見取り図(一部)

「運動 の説明」	Contentious Politics, Comparative Approach,...		
	Resource Mobilization	Political Opportunity Structure	Frame Analysis
「運動 の解釈」		「一方向」的	「双方向」的
	「集合体」	Habermas, Offe...<A>	Touraine, (Melucci) ...
	「個人」から	Giddens, Beck, Bauman...<C>	Dubet, (Melucci), <u>McDonald</u> ...<D>

表1のなかに、本書(McDonald)を位置付ければ、<D>の範疇に入ることになる。つまり、「個人」の水準から、「双方向」的な、「運動の解釈」をおこなう研究の一つということである。以下では、このような社会運動研究の見取り図(表1)を念頭におきながら、本書の紹介と批評をおこなっていくことにしたい。

2 紹介

本書は、第1章(理論的枠組みの提示)、第1部(フローから排除される若者の調査)、第2部(フローのなかを生きる若者の調査)という3部構成から成る。

⁽³⁾ EHESS内CADIS(社会学的分析・介入センター)に所属しTouraineから指導をうけたDubet、M. Wieviorka、McDonaldらの社会学者を第2世代、その指導学生でCADISに所属する者を第3世代と呼ぶ。

2.1 第1章 “Introduction: Subjectivity and Social Experience”

まず第1章では、本書が依拠する理論的枠組み——「経験の社会学Sociologie de l'expérience」(Dubet 1994)——が説明される。それは、Touraineの60・70年代の理論「行為の社会学」を引き継ぎつつ、さらに70・80年代におこなわれた調査の結果からそれを部分的に修正・拡張したものである。

そもそも「行為の社会学」とは、集合体が生み出すコンフリクトの水準を、組織・政治・歴史性という3つの行為ロジック——集合体がそれに沿って組織化され、それにそって活動する——の相互の結びつきを尺度として、分析・評価する試みであった(濱西 2004)。具体的な調査は、「組織」性を表象する(と見なされた：以下同様)当事者だけの対話、「政治」性を表象する敵手や味方との対話、「歴史性」を表象する社会学者との対話という3種類の道具立て(社会学的介入)によってなされ、そして集合体に対話のなかでそれらのロジックをどこまで結び付けることができるかに焦点が当てられた。

だが、70年代後半から80年代にかけて、Touraine自らが先頭に立っておこなった多くの実証研究の結果、そのような理論的枠組みでは運動の現実を把握しきれないことが明らかになっていく。既に運動の最盛期は過ぎ、「歴史性」の水準に達するものはごくわずか(反原子力闘争の一部)であり、大半はそれ以下の水準にも達しなかったのである。従来は、「組織」・「政治」・「歴史性」という3つの水準から構成される「歴史的行為システム」(SAH)が、モダニティを動かし歴史を作り出す「社会運動」(そのモデルは最盛期の労働運動であった)を生み出していくという認識が、トゥレーヌ学派に共有されていた。しかし、今やSAHは、組織システム・政治システム・階級システムという独立した3つの場へと解体しつつあると認識されている。そして、このような認識を再び実証的な調査をもって検証し、「双方向」的に解釈するために、「集合体」ではなく、分裂する平面を逆側に延長した集約点にいる具体的な「個人」に、注目が集まった。つまり、分裂の集約点に置かれている個人が3つのロジックをまとめあげるためにおこなっている具体的なワークというのを見ていくことができるのではないかと、本当にそのような形で分裂しつつあるのであれば、個人はその再統合のために多くの労苦を強いられているはずではないかと、というのがDubet(1994)の主張であり、McDonaldが踏襲するものである。

そこで、彼らは、「個人」の水準からアプローチを組み立てなおす。すなわち、まず個々人の抱えるコンフリクトを具体的に見ていき、それらを——組織・政治・歴史性それぞれの土台にある——「統合」・「競争」・「主体」という個人の行為のロジックに関わるさまざまなレベルのコンフリクトへと分けけていく。そして、個々人がそれらのロジ

ックとそれをめぐるコンフリクトを自分の中で結び付け、一貫した経験、一貫したアイデンティティを構築していこうとするワーク（主体性をめぐる闘争）を分析・評価していくのである。なるほど、個人に注目してもマクロなくモダニティへの潜在力の担い手としての社会運動の概念に到達することはできないのではないか、という疑問もあろう。だが、今や個人が問われているのであり、それこそが、現代のモダニティにおけるもっとも根本的なレベルでの潜在力の担い手だということを具体的な調査を通して明らかにしようとするのである（p.5-12）。

2.2 第1部 “The End of a Working-Class Experience”

個人はどのようなポテンシャルをもっているか。このような問題関心のもと、行為ロジックの分裂に直面し、経験やアイデンティティをめぐって葛藤していると思われる若者が、調査対象として選ばれた。第1部で対象となったのは、メルボルン郊外に住む15歳から25歳までの若年たち37名であり、フロー（グローバル化する資金・資本、人々、情報の流れ）から排除される若年無業者・失業者たちである。「統合」・「競争」・「主体」というロジックをめぐる3種類の対話が準備・実施された（社会学的介入）。

以下で具体的に説明するが、対話で得られた若者たちの語りを、先に整理すると表2のようになる。

まず第2章「きみはひどいところから来た：社会的経験を探求すること」では、若年失

表2 表6.1 (p.111)

Field of action	Types of action and identity	Decomposition of field
Subjectivity and creativity as freedom	• Class consciousness • Struggles for dignity • Capacity to conflictualise, produce relationship	• Fear, loss of meaning • Anger without project, directed inwards or outwards • Inability to conflictualise
Opportunities and constraints	• Strategic action-taking opportunities • Participation • Mobilising personality	• Exclusion from flows • Personal withdrawal • Anger as frustration • Competition with police
Community cohesion	• Us, our suburb • Community warmth • Norms • The other side • Roles	• Social disorganization(rubbish, drug use, unpredictable violence, theft, anomie) • Personal disorganization(violence, time, drug use, theft, defensive behavior) • Defensive communitarianism

業者たちが、自分たちの住む地域や共同体について語る。そこでは行為のロジックとしての「統合」に関連する語りとその解体に関連する語りの両方が得られる（「統合」のロジック：表2では“Community cohesion”のセル）。第3章「何か始めるべきだ：階級意識」では、まず労働組合を代表する町長二人と、若者たちの対話が描かれ、昔ながらの労働者の連帯というものの可能性が描かれる。そこでは「主体」のロジックを肯定する語りを得られた（“Subjectivity and creativity as freedom”の肯定的側面 “Types of action and identity”のセル）。次いで、地元大企業の人事部長が招かれ、若者たちと個人主義や成功の機会についての話し合いをおこなう様子が描かれる。ここでは「競争」のロジックを肯定する語りと、その負の側面についての語りを得られた（“Opportunities and constraints”のセル）。第4章「俺たちはクズだ：スティグマ化・レイシズム・危機」では、若者たちと過去にさまざまなトラブルを共有してきた警察官と、新聞記事の中で若者たちを「ホームレス」と呼び、結果的に若者たちから反感を買っていた若い活動家が招かれ、話し合いがおこなわれた（それは時には怒号に至った）。そこでは、単に敵対的なコンフリクトが、社会の創造を賭金とするような社会的なコンフリクトへと昇華するような可能性についての語りは一切生じず、単なる怒りや恐怖へと解体していく語りだけが得られた（“Subjectivity and creativity as freedom”の“Decomposition of field”のセル）。

表2は、次のことを示唆している。すなわち、まず「統合」・「競争」・「主体」という個人の行為のロジックのそれぞれに関して、それらに基づいて個々人が集合体として互いの行為を調整するための「場」(field)が存在している場合とそれが解体している場合の両方の状況があるということ。個々人は各々のロジックに基づいて集合体を形成しうるが、逆にそれを可能にする能力がないような個々人や集団は「内向きの怒り」「排除」「引きこもり」「社会解体」や「パーソナルな解体」などの、一般に「社会問題」とみなされるような状況に陥る、ということ。さらに、表2の上に行くほど自生的な要素が失われていくことから、各々のロジックに基づいて集合体を形成する場合、もっとも容易なのが、「統合」のロジックにもとづく地縁や血縁の「コミュニティ」であり、次に戦略的な動員にもとづく「参加」、そしてもっとも困難なのが「主体」のロジックにもとづく階級や尊厳をめぐる紛争する人々の連帯だということ、である。

その後のセッションでは、若者たちに自己分析の機会が提供され、彼らが最も自生的な「統合」のロジックに始まり、「競争」のロジックを取り込み、さらにはそこに「主体」のロジックを結び付けていくことができるかどうかを検討される。対話者は、著者 McDonald自身と彼の指導する大学院生3名である。第5章「我々に必要なのはモラルだ：

コミュニティを求めて」では、まず今までのセッションが振り返られる。「レイシズム」「ホームレスという性質」「家族と規律＝訓練」「犯罪」といったテーマについて振り返り、我々に必要なのは「老人に尊敬の念を持つ」といったモラルであるということが述べられ、「統合」のロジックへの回帰が見られる（p.95）。しかしながら、第6章「俺はここから逃げ出したい：社会的なロジックに対する闘争」では、将来について対話するなかで、「ここには問題が多すぎる・・・俺はここから抜け出したい」という社会的な行為のロジックいずれにも抵抗する語りがみられることになる。

つまり第1部では、3つのロジックを統合する以前に、若者たちが一つ一つのロジックに基づく集合体の形成と解体のあいだで彷徨っている様子が描かれているのである。McDonaldはそれを、「産業社会によって生み出された、若者の社会的なモデルの終焉」とみなし、SAHが解体に向かっているしるしとみなす。だが同時に彼は、「彼らは単なる被害者でもない。彼らは、社会的なロジックがますます分裂する世界、産業社会の終焉にまつわる社会的・文化的なコストに他の人々以上に直面しなくてはならないような世界のなかで、一貫したパーソナルな・社会的なアイデンティティをめぐる闘争に巻き込まれている」のだとして、若者たちの、一見して個人的なものにみえるstrugglesが現代のモダニティにおける中心的なコンフリクト（主体性をめぐる闘争）である可能性を認める（p.115）。ここでは「社会運動」の概念が問い直されようとしているのである。

2.3 第2部 “Postmodern Crisis: Navigating the Flow”

第2部は、産業社会における中心的な要素であった労働との関係性を離れて、新しい社会・文化を先取りし、第一部の若年失業者たちがそこから排除されていたところの、フローのなかでむしろ生きているような若者たちを対象にする¹¹⁾。ちなみに第2部は、社会学的介入ではなく、若者たちだけの対話つまりシンプルなフォーカス・グループ法が使用されている。

まず第7章「それらのどれでもない：ギャングの現代的経験」では、ショッピング・モールを縄張りとするホームレス・生活保護の女性のギャング集団の諸個人が、「消費」社会との間に取り結ぶ、緊張関係とそれをやりくりするワークの様子が描かれる。第8章「あんたは忘れてしまうさ：グラフィティ・ライターの可視性とモビリティ」では、電車で

¹¹⁾ Dubet (2004) も「労働運動も産業社会の外ではなく、その中から生まれてきた」とし、グローバル化のなかから生まれてくる新たな運動を模索し、反WTOなどの活動に期待を寄せている。また McDonald(2002, 2004, forthcoming)は、その実証研究をしている。

町から町へと移動しつつ特別な「places」に自分だけのサインを残していくグラフィティ・ライターたちの創造性と「respect」の関係性と戦略的やりとり（警察との関係でみられる）の混ざったワークのかたちがテーマとなる。さらに、第9章「身体と自己の間：拒食症の領域」では、摂食障害の女性・大学生の諸経験が、自己や他者とのコミュニケーションの観点から自律的なワークとして分析される。第10章では、カンボジアや中国からオーストラリアにきた移民2世の若者たち、あるいはアボリジニの若者による、エスニシティと人種、差異に関係する具体的な民族キャンペーン活動（もっとも運動にちかい）との関わり合いが描かれる。

第1部の仮想敵がおなじ「双方向」的な解釈アプローチでありながら集合体のレベルに議論を限定してしまう60・70年代のTouraineの議論であるとするれば、第2部の仮想敵は、おなじ個人の水準から議論を組み立てつつも、モダニティについての固定したモデルを人々の実践に適応する、GiddensやBauman、Beckなどの「一方向」的な「運動の解釈」である。それらの議論は、暗に、マクロな社会変動によって若者たちの経験やアイデンティティが半ば受動的に形成されていくということを前提にしている。それに対して、本書は、若者たちが自分自身の経験やアイデンティティを一貫したものとして再構築する具体的な実践・ワークを調査していき、その結果、現代の「主体性をめぐる闘争」が「消費」や「身体」、「場所」、「差異」といったトピックを中心により積極的なワークとして構成されていく可能性を見出したのである。後述するように、第2部での探求された可能性は、2000年以降のMcDonaldの画期的な運動論の下地となる。以上が、本書の概要である。

3 批評

最初に述べたように、まず表1の同じ範疇内で比較をおこない、つぎに隣接する諸範疇と、最後に「運動の説明」アプローチと比較をおこなう。

3.1 「個人」・「双方向」アプローチ内での比較・・・本書と、<D>の他の諸研究

まず、おなじく「個人」の水準から「双方向」的に「運動の解釈」をおこなうアプローチ同士の比較である。本書のほかにも、すでに80年代にフランス・ベルギー・チリのマージナルな立場におかれた若者を対象に、90年代にフランスの小学生、中・高校生、大学生・院生を対象に、トゥレーヌ学派第2・第3世代の研究者（Dubet; Martuccelli;

Lapeyronnieほか)は、「個人」「双方向」アプローチによる調査研究をおこなっている(cf: 濱西 2004)。だが、それらがフローから排除される若年失業者やそのフローの前段階にいる子供・若者の諸経験・ワークを対象にしたものであるのに比べて、本書は、排除される経験(第1部)だけでなく——もちろん第1部それ自体にも、オーストラリア・メルボルンという地で先行研究と同様の調査結果を得ることに成功したという意義はある——、フローのなかを生きる経験(第2部)をも捉えようとするものであり、「主体性をめぐる闘争」のより広い場を探求し、さまざまな可能性を見出した点で大きな意義がある。

McDonaldは、2000年以降、「社会運動」概念に対抗して、他者性・差異性・同時性(および身体性)から構成される「公的経験」や「経験運動」(experience movement)という概念を提唱するにいたるわけであるが(McDonald 2002, 2004; 大畑 2004; 濱西 2005)、本書第2部では、すでに次につながる要素(グローバル化、消費、身体、場所、差異)が個々人のフローを生きる経験・ワークのなかに見出されている。McDonald(2004)によれば、現代の運動は、自分自身の経験や主体性をめぐってstruggleする個々人が、同時に同じ場所で互いを承認しあいつつ共在する場として運動を再構築する試み(経験運動)であり、多様な人々が差異を承認しあいともに生きることの可能な社会のモデルを遂行的に提示するひとつの実験と見ることができる。そのような見方は、もはや60・70年代のトゥレーヌ学派の理論的枠組みを根本的に超えていくものである。

3.2 「個人」アプローチ内での比較・・・本書と、<C>の諸研究

つぎに、「個人」の水準において、「一方向」的なGiddensらの議論と「双方向」的なMcDonaldのそれを比較してみよう。それらの比較は、本稿の中で折に触れておこなってきたことであるが、「双方向」的アプローチの長所を強調しすぎたきらいがあるので、ここではその問題点について論じてみたい。「双方向」的アプローチの限界は、実証的に検討可能な、あるいは検討されてきた社会モデルが選択・継承されたり、あるいはそのモデルを「個人」の側からみた場合にどのような状況として立ち現れるかという観点から指標化・操作化がおこなわれたりするので、どうしても枠組み構成に現実的な縛りがかかるという点である。GiddensやBauman、Beckのような大胆で魅力的な構成はとることができない。またこのアプローチは、現代のモダニティと運動の相互的な影響を勘案するために議論がつねに流動的にならざるをえない。さらに、運動のもつ潜在力のリアリティが失われていく状況では、議論の前提が動揺してしまう。運動にモダニティの潜在力の担い手と

して大きな位置を与えることは、両刃の剣なのである。

3.3 「双方向」アプローチ内での比較・・・本書と、の諸研究

「双方向」アプローチのなかで、「集合体」の水準に焦点をあてるTouraineの議論と「個人」から議論を組み立てる本書とを比較してみよう。「集合体」の水準に焦点を絞る議論の問題としては、既に述べたように、現実的に、「集合体」が形成されにくくなっている状況に対応できないことが挙げられる。とはいえ、「個人」の水準から議論を組み立てる場合には、現実には存在する産業社会期とあまり変わらない伝統的な運動形態への関心が薄くなるという危険性もあろう。それゆえ、個々人のワークだけに枠組みを適用して良しとするのではなく、「集合体」のなかの「個人」にも適用し検討することが求められる。

3.4 社会運動研究全体の中での比較・・・本書と、「説明」アプローチの諸研究

最後にもっとも大きな比較軸であるが、「運動の説明」アプローチによる諸研究と「運動の解釈」アプローチに依拠する本書との比較を試みてみよう。本書は、明らかに「集合体」の単位性を前提としている「運動の説明」アプローチに対して、その前提を問いなおす試みとして位置付けられる。その点でより懐疑的なアプローチである。だが調査方法論的には、「説明」アプローチのほうがより懐疑的であって、実証研究においては相当厳密な手続きが踏まれている。例えば調査の代表性について、本書では調査に参加した若者たちの母集団が良く見えない。ある程度極端な事例を取り上げることで議論は見えやすくなるが、逆にその結果を一般化するのは難しくなる。

参考文献

- Dubet, F., 1994, *Sociologie de l'expérience*, Paris: Seuil.
- , 2004, "Between a Defense of Society and a Politics of the Subject: The Specificity of Today's Social Movements," *Current Sociology*, 52(4): 693-716.
- 濱西栄司、2004、「社会学的介入の理論と実践——アラン・トゥレーヌ、フランクフルト学派、ヴァンセンヌ学派」『現代社会理論研究』、14: 114-127.
- 、2005、「集合的アイデンティティから経験運動へ——トゥレーヌ学派モデル/社会学的介入によるLETS・変容の事例分析」『ソシオロジ』、154: 69-85.
- McDonald, K., 2002, "From Solidarity to Fluidarity: Social Movements beyond 'Collective Identity'," *Social Movement Studies*, 1(2): 109-128.
- , 2004, "Oneself as Another: From Social Movement to Experience Movement," *Current Sociology*, 52(4): 575-593.

——, forthcoming, *Global Movements: Action and Culture*, Victoria: Blackwell.

大畑裕嗣、2004、「モダニティの変容と社会運動」、曾良中清司・町村敬志・長谷川公一・樋口真人編著
『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂、156-180.

(はまにし えいじ・修士課程)